

## 【学会報告】

# Asia-Pacific Conference on Performance Analysis in Sports 2019 に参加して

梶山俊仁\*<sup>1</sup>

## I. Epilogue

2019年10月14日(月)から10月17日(木)までの間、Asia-Pacific Conference on Performance Analysis in Sports (APCPAS) 2019 に参加した状況について報告する。APCPAS2019 はアジアスポーツパフォーマンス分析国際協会 (ISPASA) が主催し、親学会を International Society of Performance Analysis in Sport (ISPAS) に持つ。ISPAS におけるアジアの章であり、スポーツパフォーマンス分析分野の知識をグローバルに開発する国際的な取り組みの一環として学会が開催されている。私はラグビーにおけるルール変更がゲーム戦術に及ぼす影響についての研究に取り組んでおり、今回はその継続的な研究成果について発表を行った。またホスト国の大会実行委員の一員として学会の企画・運営に携わる機会にも恵まれた。

私は名古屋大学の地元である愛知県岡崎市の出身であるが、医学部のある鶴舞キャンパスを除いて今回初めて、学会会場のある東山キャンパスに足を踏み入れることとなった。岐阜から名鉄で金山まで移動、地下鉄名城線左回りに乗り換え、名古屋大学駅で下車した後、地下鉄出口から徒歩0分、理学部入口に立った。幼い頃から「名大(メイダイ):名古屋大学」と言うフレーズは三河地方に住む人間の生活に溶け込んでいた筈であった(名古屋圏において「メイダイ」は明治大学ではない)。ところが、初めて目にする光景は「こんな身近に重厚な歴史と伝統を感じさせる大学のキャンパスがあったとは…ショック!流石、旧帝国大学」偽らずの心境であり「百聞は一見にしかず」改めて現地へ赴くことの大切さを実感した。広大なキャンパスを7-8分歩くと本学会会場である瀟洒なつくりの野依記念学術交流館(図1)が姿を現した。



図1 野依記念学術交流館(入口)

## II. Contents

髭の紳士、名古屋大学総合保健体育科学センター教授佐々木康大会会長が登場され、私を出迎えて頂いた。佐々木先生は日本ラグビーフットボール協会技術開発・科学情報委員長も務められている方である。初日の14日は台風の影響で基調講演が順延され、実行委員顔合わせ、会場準備・設営の後、簡単なウェルカムパーティーが催された。本学会における日本以外の参加者はアジア・オセアニア地域から、韓国、マレーシア、中国、豪州、台湾、シンガポール、香港、タイ、その他の地域から、英国、USA、南アフリカ、ポルトガル、ウルグアイと正に世界中のアナリストが集めた(図2)。



図2 ランチの様子

受付日 2020.1.10

\*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

2日目の15日はゲストスピーカーとして、英国ミドルセクス大学・JAMES NICOLAS氏、プトラマレーシア大学・TENGGU FADILAH BINTI TENGGU KAMALDEN氏、英国国立スポーツ研究所 JULIA WELLS氏、韓国ダンコック大学・CHOI HYONGJUN氏の4氏が招かれ1. 何故分析を行うのか？ 2. 何を観るのか？ 3. どのように活用するのか？ についてのテーマが示され、4氏によるラウンドテーブルディスカッション（図3）が企画された。その他、大会期間中に8件の基調講演が行われ、日本から日本ラグビー協会専務理事岩淵健輔氏（図4）、前回のラグビーワールドカップで大活躍した五郎丸歩のメンタルコーチとして有名な荒木かおり氏も登壇された。

個別の研究発表は1. Performance Analysis (1)Team Sports (Football, Rugby, Volleyball, Basketball, Baseball, Handball. (2)Racquet Sports (Tennis, Table tennis). (3) Track & Field. 2. Coaching, Training, Medicine, Strength & Conditioning, Management, Sociology, Psychology. 3. Artificial turf. の各分野からオーラル18件、ポスター17件の発表がそれぞれ行われた。

今回私の発表の概要は「ラグビーの「Six Nations Championship」における競技成績上位チームと下位チーム、それぞれ3チームずつを比較し、これらの傾向を検討することで、ルール変更がスクラム戦術に及ぼす影響を明らかとすることであった。スクラムに限らず、ラグビーの競技規則は頻繁に改正が行われる傾向があり、この結果から、競技規則の改正はプレー戦術に影響を及ぼすことが確認できた。競技規則の改正の意図を理解し、チーム戦術や個人スキルをより一層高める必要があることが示された。」であった（図5）。フロアではラグビーワールドカップ2019で日本が予選プールでScotlandを撃破し4戦全勝で決勝トーナメント進出を決めた翌々日であったことが多分に影響して、興奮冷めやらぬにわかラグビー愛好家らしき研究者も含め、ラグビーのインプレー時間、アウトプレー時間、ゲームフィットネスに関わること等ディスカッションは多岐に及んだ。更にラグビー日本代表が誇る稲垣、堀江、具選手に代表される強力スクラムが研究テーマと言うこともあり、フロントロー（ラグビーのポジション名の1つ）出身でない私に門外漢のスクラムの技術的なことまで、数多くの質問を頂戴した。その中でもミドルセクス大学 JAMES NICOLAS氏から、早口で多少聞き取れない部分があったが「ゴール型ボールゲームの特徴を一般化する」上での大変貴重な示唆を頂いたことは本当にラッキーであった。何よりも発表の質疑応答を防衛大学教

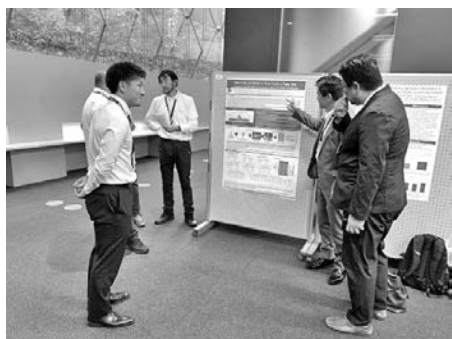


図5 発表の様子



図3 ラウンドテーブルディスカッション



図4 日本ラグビー協会専務理事岩淵健輔氏(左)



図6 スポーツアナリスト資格講習会

授山本巧先生の強力なサポートを頂きながら、何とか終えたことが大量の冷や汗と引き換えに私の貴重な経験となった。

3日目の16日はスポーツアナリスト資格講習会(図6)に22名が参加した。前日のラウンドテーブルディスカッションに基づき、データアナリシスについての自身の考え方、独自の視点、なぜそのデータを用いるのか? 現場に活かされるデータ処理の方法とは? 等各参加者の発表・質疑応答が行われ、条件を満たした参加者にはアナリストの資格がISPASAから授与された。

### Ⅲ. Prologue

最終日の17日は佐々木先生による「ラグビーワールドカップ及びオリンピックにおけるゲーム戦略」が最終基調講演となり、4日間の全ての日程が終了した。海外のゲスト及び学会参加者は勿論、九州、沖縄、関東からの学会参加者も多く、近県に勤務する大会実行委員(図7)の私らは最後の跡片付け、野依記念学術交流館の鍵の引き渡しを終え家路に着いた(図7)。



図7 大会実行委員(の先生方)

これまで述べたように今学会への参加により、非常に実りの多い有意義な4日間を過ごすことができた。改めてこのような機会を与えて頂いた佐々木大会会長はじめとする学会員の皆さま、また朝日大学はじめ職場の皆さまに感謝を申し上げます。これらを今後の教育・研究活動に少しでも役立てるべく、日々の業務に邁進することを心に誓ったことを報告して筆を置こうと思う。

